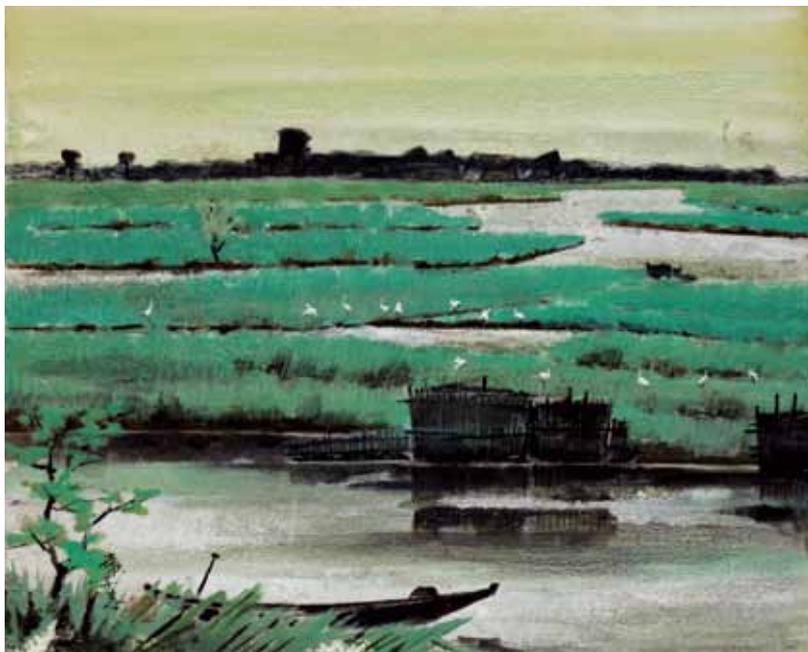


平成27年度 新収蔵美術・書作品介绍

当館では、市民の芸術文化振興を図るため、新潟市北区にゆかりの深い作家の作品を収集・公開しています。今年度は、新潟市内外の所蔵家からの寄贈により、高野常与志の絵画1点と、弦巻松蔭の書作品2点を収蔵しました。

高野常与志(1924—1993、北蒲原郡木崎村(現新潟市北区)生まれ)



高野常与志は、小島丹漾に師事して日本画を学びました。農業のかたわら地域の風景や働く人々を素描する日常のなかで、高野が作品として画面上に描き出したのは、厳しい環境のなかで働き、生を謳歌する実直でたくましい人々の姿でした。

この作品は、高野のもう一つのテーマである自然を描いたものです。簡潔な形態を水平に重ねた構図と、金泥と銀泥を控えめながら使用して画面に招じ入れた光の効果によって、鈍いかがやきを放つ黄昏の水辺の眺望が広がっています。近郊の福島潟のスケッチをもとに描かれていますが、自然への深い共感にみちた高野の心象表現といえましょう。

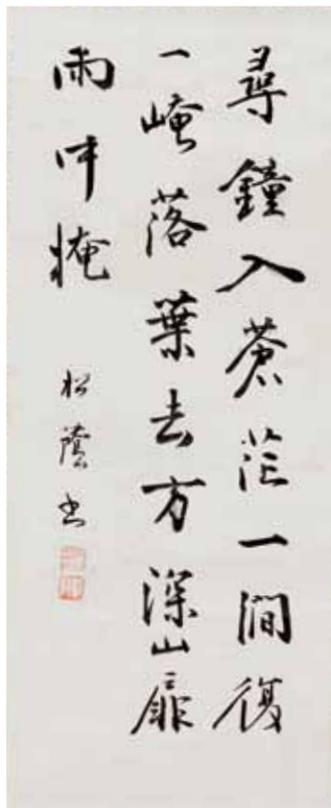
高野常与志
「福島潟」
岩絵具、金泥、銀泥、紙
39.5×48.0cm

弦巻松蔭(1906—1995、北蒲原郡葛塚町(現新潟市北区)生まれ)

1936年から9年間、書芸術論で頭角を現した、在京の上田桑鳩のもとで学書に打ち込んだ弦巻松蔭は、終戦まもない1945年11月に、故郷で個展を開催しました。「雨中過玉遮山」はこの頃の制作で、臨書研究の成果がよく表れた作品です。

師桑鳩は、1952年に、研究会「奎星会」(1940)を「個性と創造性を重視した現代書」の公募団体へと拡大します。研究会の創立同人として展覧会の振興を担うこととなった松蔭は、「手毬会」を特設し、自身の塾生たちの創作・古典研究・鑑賞の場としました。「寿」は、松蔭が創作と教育の意欲に満ちた手毬会創成期の作品です。

1. 高青邱詩「雨中過玉遮山」
1945年頃
38.0×15.5cm
軸装
2. 「寿」
1954年
227.5×132.5cm
軸装
第3回手毬会出品(1954)



1



2